

Departmental Bulletin Paper / 紀要論文

「賢者ナータン」の三つの指輪の話に表わ れたレッシングの思想(その二)

Lessings Gedanken in der Ringparabel des dramatischen
Gedichts "Nathan der Weise"

太田, 伸広

Ota, Nobuhiro

人文論叢：三重大学人文学部文化学科研究紀要. 1991, 8, p. 23-38.

<http://hdl.handle.net/10076/6326>

『賢者ナータン』の三つの指輪の話に表れた レッシングの思想 (その二)

太田伸広

要旨 レッシングのドラマ『賢者ナータン』の三つの指輪の話をもッカチオの『デカメロン』の三つの指輪の話と比較すると、キリスト教に対するレッシングに固有な批判、彼独自の思想が明らかになる。それは、神を客体化し、人間を主体にした思想、つまり、神が人間を助け恩恵を施し、奇跡を行うのではなく、人間が神の力の顕現を助長し、神をして、神を媒介として、人間に恩恵を施し、奇跡を行うということ、人間の神に対する愛や神の人間に対する愛ではなく、人間の人間に対する愛こそが、根本であり、かつ重要であること、神の力、宗教の力、信仰の力が人間を善にするのではなく、人間の善に向けての、人間の理性の発展に向けての、無限の努力が人間を善にすること、それこそが人間にとって最も大切であること、一言で言えば、神が主で、人間が従なのではなく、人間が主で、神が従であるという思想であり、キリスト教からの人間の理性の解放の過程、神学の立場における神学の否定、神の人間化の過程、ドイツ古典哲学を経て、フォイアーバハの宗教批判によって完結する、ドイツの宗教批判の歴史的発展過程の中に、重要な位置——それも非常に初期の段階で——を占めるものである。

第三章

ボッカチオとレッシングの三つの指輪の話と比較してみて、すぐにわかることは、レッシングの三つの指輪の話は、完全なレッシングの創作だということである。それは、文字通り、ボッカチオにヒントを与えられたというだけである。(注8)

このことは、三つの指輪の話の形式面だけからみても、明らかである。レッシングの三つの指輪の話の内、半分以上がボッカチオの話には全然見られない、レッシング独自の話である。ボッカチオの場合には、「いずれが真の律法、真の戒律」を「持っているかは、指輪の問題と同じく、未解決のままでございます。」という答えで満足して、終わっている。レッシングの場合には、ナータンが三つの指輪の話をした後に、ボッカチオの答えと同じように、「真の指輪は証明できませんでした。今のわれわれの問題であります真の信仰もこれと殆ど同じで、証明できないのです。」——実はこの表現にも既に重要な点で相違があるのだが——と言うと、スルタンは「何だって？こんなことでわしの問いに対する答えとしようというのか。」と怒る。この後、ナータンの話は延々と続く。その長さは、それまでの話の倍近い。

内容面からみると、ナータンの「答え」に対して、スルタンが不満を示して怒る場面の後に初めて、ナータンの真の知恵、知恵の神髄が始まる。それはボッカチオには全然ない、完全にレッシングのオリジナルな話である。否、それは、ボッカチオの思想を否定していると言っても差支えないかもしれない。もう少し正確に表現するならば、それは、ボッカチオの思想を克服して、さらに発展させようとしていると言うことができるであろう。なぜならば、ナータンがボッカチオの『デカメロン』の賢者メルキセデックの答えと同じような「答え」

をしたにもかかわらず、スルタン(=レッシングの一側面)は、「何だって?こんなことでわしの問いに対する答えとしようというのか。」と、ボッカチオの下した結論(=未解決の問題という答え)にあからさまな不満を表明しているからである。サラディノ(ボッカチオの一側面)がメルキセデックの答え——この答えは「わかりません」ということの素晴らしい文学的表現に過ぎない。あるいは、そういう意味の知恵である。——にいたく感心しているのと極めて好対照をなしている。さらに、ボッカチオの場合には、「未解決のままでございます。」という答えがすなわち結論になっているのであるが、レッシングの場合には、それは答えでないばかりか、結論などとは到底言えないものなのである。そのことは、ナータン自身が、真の宗教を証明することができないと述べたことは「答え」ではなく、三つの宗教を区別して、これが真の宗教だと言うだけの勇気がないことの「弁明」に過ぎないと、言っていることから、明らかである。レッシングにとっては、いずれが真の宗教かというような真理に属する問題は、人間のような小さな存在が扱う問題ではなく、専ら神に属する問題なのである。(注9)最後に、スルタンは「指輪だと!わしを愚弄するな!」とまで言って、憤激している。このことは、ボッカチオの下した結論、ボッカチオの知恵に対するレッシングの憤慨であると言えなくもないからである。

ボッカチオとレッシングでは、それそも、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の真贋を問う王そのものの英知が違う。『賢者ナータン』に登場するサラディンの英知は、最初から『デカメロン』に登場するサラディノは言うまでもなく、賢者メルキセデックの知恵をも凌駕していて、かつまたそれよりはるかに深い。というか、サラディンは、賢者メルキセデックの答えも既にわきまえているのである。否、最初からそれを承知のうえで、ナータンに質問をしているのである。少なくともそう判断できる。このことは、『賢者ナータン』の成立過程から言えるだけではない。サラディンはナータンに対し、「お前のような男が、たまたま生まれついた所の宗教をそのままじっと信じているわけはあるまい。・・・見識を持って、なんらかの根拠から、よりよい宗教を選択してのことであろう。さあ、・・・お前の見識をわしに話してくれ。その根拠をわしに聞かしてくれ。・・・その根拠に基づく選択をわしに教えてくれ。」と言う。サラディノと違って、サラディンは、ナータン個人の立場を離れての、客観的な判断(真理)を聞いているのではない。ユダヤ教を選択した際の、「たまたま」というような偶然的な選択や判断でもない。彼の必然的な選択、主体的な判断、根拠を聞いているのである。サラディンは、ナータンにとって何か外的な、よそよそしい、人に誇るべき、知恵比べの知恵——この中には、その場のがれの言い訳的な知恵もある——のようなものを尋ねているのではなく、ナータンの内面に踏み込んだ、事柄に忠実な、まさにナータンの生きざまそのものであるような英知を問うているのである。だから、ナータンは「スルタン様、私の心の内をすっかり打ち明ける(注10)前に、ちょっとした話(『デカメロン』の指輪のような話)をすることをお許し下さいませんか。」と言っているのである。そして「真の信仰もこれ(=真の指輪)と殆ど同じで、証明できないのです。」というナータンの答えに対して、スルタンが「何だって?こんなことでわしの問いに対する答えとしようというのか。」、「指輪だと!わしを愚弄するな!」と怒るのも、スルタンが、賢者メルキセデックの答えを既にわきまえていて、それ位の知恵には満足がいけないがゆえに——少なくとも彼の応答から判断する限り——質問しているからである。だから、賢者メルキセデックの知恵は、『賢者ナータン』の英知の披露の単なる序曲に過ぎないと言えるであろう。それ以上のものではなから

う。ここにも、レッシングが新しい話を創作したと自負する(注11)だけの理由の一つがある。それゆえ、レッシングは、三つの指輪の話の冒頭から、否その話を始める前から、ボッカチオを乗り越え、前進しようとしていると言っても間違いはないと思う。

さて、第二章の第一節で紹介した、ボッカチオの三つの指輪の話に表れた思想の特徴を挙げるならば、第一に、諸宗教に対する平等主義、つまり、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教に優劣をつけず、平等に扱っていること(注12)、第二に、三つの宗教の内、いずれが真の宗教であるかは今だに未解決であるという結論、つまり三つの指輪の真贋を決定することはできないという結論——それはもともと証明不可能なものであるというようなポジティブな結論でもなく、また証明しようとした訳でもないがゆえに——に端的に表れているように、宗教の真理性に対する懐疑主義、より正確に言えば、宗教への無関心主義である、そして最後に、さまざまな宗教(の存在)を認め、それらに対して同じように寛大な態度がとれる——唯一絶対的に正しい宗教は存在しないという考え、唯一神の否定の思想がこの前提になっている——という意味での、宗教的寛容の思想であろう。(注13) 総じて、宗教問題に対する消極的対応、ないしは、一歩進んで、宗教の消極的否定がボッカチオの思想であると言えよう。

しかし、ボッカチオの思想が宗教問題に対する消極的対応、ないしは、宗教の消極的否定であるとは言っても、それはあくまでも相対的な規定に過ぎない。歴史的に見るならば、それは、自己の宗教の絶対的真理性、唯一神を主張し、他の諸宗教を否定、抹殺しようとする、諸宗教間の相克、闘争、戦争に対する痛烈な批判、その意味で、積極的な宗教批判であり、宗教からの人間の解放、人間性の謳歌、人間の自由と平等の獲得の長い歴史的な歩みの重要な一里塚であると言えよう。(注14)

このことは、キリスト教の唯一絶対的正当性を説教する指輪の話と比較するならば、一目瞭然である。たとえば、キリスト教の正しさを説教するために作られた、ある指輪の話は次のごとくである。ある騎士が臨終の床で、長男には地所を、次男には財産を、三男には指輪をやるが、長男と次男にも同じような指輪を作ってやる。父が死ぬと、三人が「私こそお父さんの尊い指輪を持っている。」と相争う。そこで、数人の病人が引っ張って来られ、指輪の効験を試す。すると、三男の指輪がすべての病人を直す。彼の指輪が奇跡の力を発揮するのである。そのため、長男と次男の指輪が偽物であることがいとも簡単に判明するのである。もちろん、長男はユダヤ教で、約束の地を、次男はイスラム教で、この世の財宝を、三男はキリスト教で、この世で最も尊い指輪、すなわち奇跡の力、信仰を与えられたという設定になっている。この指輪の話は、話としても、文学としても、価値は殆どないが、ただ一つ言えることは、キリスト教が唯一絶対的に正しいことを民衆に説得するには、極めて分かりやすく、非常に役に立つ話となっているということである。この指輪の話の立場からするならば、ボッカチオの三つの指輪の話は、恐らく許すことのできない、ラディカルな内容の話であるということになるであろう。(注15)

それゆえ、ルネサンス(初期)の時代のボッカチオ(14世紀)と批判的精神の発達した啓蒙主義の時代のレッシング(18世紀)とを比較したがゆえに、ボッカチオの思想が宗教の消極的否定であると規定できたのであって、キリスト教の正当性を訴える指輪の話と比較するならば、それは宗教の積極的否定であると規定できるであろう、もしくは、ボッカチオは、批判的精神が極めて旺盛であると言えるであろう。

レッシングは、そのようなボッカチオから更に一步も二歩も前へ進んで行く。このことを、今度はレッシングの完全な創作の箇所を分析することによって、明らかにしたい。

まず、レッシングとボッカチオの三つの指輪の話で、根本的に異なるところは、大前提である指輪そのものの内的価値の相違である。ボッカチオが単に「特別に美しい高価な指輪」の「値打ちと美しさのためにそれを誇りとして」、つまり家宝として、「代々の相続人に伝えようとする」という設定にしているのに対し、レッシングは、「測り知れない価値のある指輪」には、「秘密の力がありまして、この力を堅く信じて指輪をはめておる者は誰でも、神と人間に愛される」という設定にしている。これはレッシングとボッカチオの思想の根幹に係わる基本的な、根本的な相違である。特に「神と人間に愛される」「秘密の力」が指輪にあるというレッシングの設定、もっと厳密に言えば、「神」に加えて、「人間に愛される」「秘密の力」が指輪に備わっているという彼の設定は、後に詳しく考察するが、彼の思想の要となる大前提である。なぜならば、彼の場合には、その「人間に愛される」という「秘密の力」が「判決を下す」からである。「裏切者を見つけ出して、是非復讐してやりたい」と相争う三人の兄弟達に対し、裁判官(ナータン)は、三人の中で、「お前達二人が最も愛しているのは誰だ。」と問う。他の二人に最も愛されている者が真の指輪を持っていることになるからである。なぜならば、真の指輪をはめて、その「秘密の力」を信じているものが、他の「人間に愛される」からである。もし三人の内、誰も他の人から愛されていないならば、それは、全員が偽物の指輪を持っていることの、覆しようのない、確実な証拠になる。ところが、骨肉の争いをしている兄弟たちは、裁判官のその問いに対し、当然のことであるが、「それは私です。」と答えられず、黙ってしまう。そこで裁判官は、お前達の指輪は「外に向かっては力を発揮しないのか。めいめいが、ただ自分自身だけを一番愛しているのか。おお、それでは、お前達は三人とも皆、詐欺にかかった(偽物を掴まされた)詐欺師だ。お前達の指輪は、三つともすべて本物ではない。」と大胆な帰結(最後の判決でないという意味で、また前提条件に対する必然的結果という意味で、判決としないで、帰結としておく)を導き出す。これを宗教に当てはめて考えるならば、おのずと明らかなことではあるが、三つの宗教がお互いに愛しあったり、尊重しあったりせず、「自分自身だけを一番愛し」、つまり、自分を唯一絶対的に正しい宗教とみなして、互いに相手を邪教として排除し、撲滅しようとして、戦う限り(ならば)、それらはすべて真の宗教ではなく、偽の宗教であるということである。ここには、すでにボッカチオの影すらない。レッシングの論理的に首尾一貫した、大胆不敵な帰結があるのみである。

しかし、レッシングの主張の力点は、そのアポードジス(帰結節)にあるのではなく、プロータジス(条件節)にある。すなわち、<三つの宗教がお互いに愛しあい、尊重しあわず、「自分自身だけを一番愛し」、つまり、自分を唯一絶対的に正しい宗教とみなして、互いに相手を邪教として排除し、撲滅しようとして、戦う限り(ならば)>という箇所に力点があるのであって、<それらはすべて真の宗教ではなく、偽の宗教である>という断定的な帰結の箇所に力点はないのである。もっとも、プロータジスが事実であるならば、アポードジスに力点に移るといって誠に微妙な言い回しではあるが。プロータジスが事実であると認め、認めるところまでいかなくとも、少なくとも、そう感じた当事者にとっては、アポードジスに怒りが集中する、という論法なのである。換言すれば、このアポードジスに怒りを覚えた人々は、プロータジスを事実であると認めたことになる、という論法である。怒りの責任の所在をは

つきりさせるためなのである。つまり、怒りの責任の所在は、創作者のレッシングにはなく、邪教、異教、異端の族や無神論者に対する抑圧、迫害、虐殺、絶滅戦争などの愚かな行為を繰り返している「怒りの当事者」(アポードジスに憤激を覚えた人)にあるのである。レッシングは、第一章で考察したように、ゲーツェ牧師との神学論争を中止させられ、その継続として『賢者ナータン』を作ったという経緯があるがゆえに、このような巧みな弁論術的な論法をとっているであろう。

ところで、以上のような言語学的な詮索はさておき、事柄に即して考察しても、レッシングの主張の力点は、アポードジスにあるのではなく、プロータジスにあることは明白である。

裁判官は、三人の息子達に判決を下すかわりに、次のような忠告を与える。「お前達めいめいが、父親の指輪を持っているのであれば、めいめいが自分の指輪こそ間違いなく本物だと信じなさい。・・・確かなことは、父親がお前達三人すべてを愛していたこと、しかも、ひとりをはひきして、他の二人を苦しめたくないが故に、同じように愛していたことである。さあ！父親の清廉な、偏見のない、自由を愛を倣おうとめいめいが熱心に努力するがよい！お前達めいめいが、指輪の宝石の力を顕現させる競争において、努力するがよい。柔和な心、心から人と仲良くやっていくこと、善行、心底からの神への帰依によって、その力の顕現を促すがよい。そして、それからお前達の(はるか先の)子孫の代になって宝石の力が顕れたならば、何万年以上も先のその時に、私はお前達を再びこの裁判官席の前に召還することにす。その時には、私より賢い人がこの裁判官席に座っていて、判決を下すであろう。退廷しなさい！」

この裁判官の忠告——ここで、レッシングが忠告と言って、判決と言っていないのは、彼の持ち前の謙虚さの現れであると同時に、判決は、人間の類としての無限の努力が結実したのちに初めて下す、最後の性格のものであるがゆえに、忠告と言っているであろう。——の核心は、指輪(=宗教)の真贋を全く気にせず、信ずること、宗教の精神を確信して、努力すること、常に善い行いを心がけて、日々実践することがかけがえのないものであるということである。「父親の清廉な、偏見のない、自由な愛を倣おうとめいめいが熱心に努力すること」、「指輪の宝石の力(=「神と人間に愛される」「秘密の力」、もしくは、「奇跡の力」)を顕現させる競争において、努力すること」、「柔和な心、心から人と仲良くやっていくこと、善行、心底からの神への帰依によって、(「神と人間に愛される」)その力の顕現を促す」ように努力し、実践すること、これらの努力こそが、人間を人間たらしめるのであり、人間の価値を造り上げ、人間を完成に導くのである。人間にとって重要なことは、まさにそのことなのである。「ある人が所有している、もしくは、所有していると思っ込んでいる真理ではなく、その人が真理を認識しようとして注いだ誠実な努力が人間の価値を造り上げるのである。なぜならば、真理の所有によってではなく、真理の探求によって、人間の諸力——この中のみ人間のますます豊かになっていく完全性が存するのである——は大きくなるからである。所有は(人間を)無為に、怠惰に、高慢にさせる。」というレッシングの言葉がそのことを証明して余りある。さらに言えることは、宗教の真贋の決定は、もともと人間にとってはどうでもよいことなのである。それは神の権能に属することなのである。「父親が、三つの指輪を区別することができないように作らせたのだから、わたしのような者には、とてもそれらを区別するだけの勇気がございません」とか「純粋な真理はやはりあなた(神)だけのものなのです」という言葉がそれを裏付けている。そして、人間の諸努力の結果がどうなるかもさ

ほど重要ではないのである。「何万年以上も先」にそれらの諸努力の結果が現われるかもしれない、ということは、諸個人の一生の間にはその結果は現われない、努力が報われないかもしれないということなのである。努力そのものが大切なのである。

以上のボッカチオとレッシングの三つの指輪の話の比較を整理して言うならば、ボッカチオは宗教問題の外にいる。レッシングは宗教問題の渦中にいる。ボッカチオは宗教の争い、宗教論争の過程から出て、少し距離を置いて判断を下す。(注16)レッシングは宗教の争い、宗教論争の過程に入って、その中で判断を下す。ボッカチオは諸宗教に対して無関心である。ボッカチオは神を信じない。レッシングは諸宗教の現状に対して無関心ではいられない。レッシングは宗教(キリスト教)の精神を大切に、道(生き方)を求めている。ボッカチオは、これが真の宗教である、もしくは真の宗教の姿はかくあるべきであるとは一言も言わない。レッシングは、真の宗教とは何か、いかにあるべきかを徹底して追求する。ボッカチオは宗教を外から、外面から消極的に否定する。レッシングは宗教を内から、内面から、積極的に否定する。したがって、ボッカチオの否定(話)は、どこかコーミッシュで楽しい。(注17)レッシングの否定(話)は鋭く、ラディカルで深刻である。一言でいえば、ボッカチオは、宗教の立場とは違ったところで、それを否定するのに対し、レッシングは、宗教の立場において宗教を否定する。ボッカチオは神、天国、地獄ではなく、人間、地上、現世を問題にする。(注18)つまり、ボッカチオは神に対置された人間を問題にする。レッシングは神の中の人間を問題にする。ボッカチオは、三人称複数=彼らのキリスト教を問題にする。キリスト教への無関心である。キリスト教そのものの控えめな拒絶である。もしくは、揶揄である。彼には揶揄の精神がある。レッシングは、二人称単数(時に複数)=汝(ら)のキリスト教を問題にする。彼はキリスト教そのものは否定しない。もちろん、揶揄など決してしない。真剣そのものである。あたかも、ルターが現存のキリスト教(の腐敗)に対し、原点の聖書に立ち返って、それを批判し、新教(彼の言う真のキリスト教)を唱えたかのように、(注19)レッシングは、汝(ら)の言うキリスト教、汝(ら)の理解するキリスト教、現存のキリスト教を問題にし、それに対して、キリスト教の精神、より正確に言うならば、キリスト教の本質をとことん突き詰める。

レッシングとボッカチオの比較はこれ位にして、ナータン自身の言葉を、別の側面から、突っ込んで考察することによって、レッシング自身の思想をさらに一層明らかなものにしていきたい。

サラディンの「お前は大変賢明なのだから、どの信仰、どの戒律がお前に最も納得がいったのか、ひとつわしに言ってみてくれ。」「お前のような男が、たまたま生まれついたところの宗教をそのままじっと信じている訳はあるまい。もしそうだとしたら、見識を持って、なんらかの根拠から、より良い宗教を選択してのことであろう。さあ、それなら、お前の見識をわしに話してくれ。その根拠をわしに聞かしてくれ。・・・その根拠に基づく選択をわしに教えてくれ。」という台詞は、無意識で無自覚な幼児のうちに洗礼を受け、個人が宗教を選択する余地を与えないでキリスト教徒をつくる、キリスト教の思想とは異質であり、それに対する批判となっているだけでなく、幼児洗礼の必要性もしくは有効性を否認し、信仰を告白した後に洗礼をすべきだとして、成年に(再)洗礼をする再洗礼派の思想とも異なる。なぜならば、レッシングのいう選択には、ユダヤ教やイスラム教など、キリスト教でない宗教の選択も入っているからである。

それらの台詞は、キリスト教に対する偶然的な思いつきの批判ではない。また、批判のための批判しか眼中にない、いわゆる批判屋のするような批判でもない。批判そのものが目的でもない。自らの思想、意見の自然な吐露である。それらの台詞からは——レッシングがスピノザ主義者であることを表明したこと、フリーメイソンの会員になったが、その集会には一度も参加しなかったこと、思想と出版・言論の自由を主張した(注20)だけでなく、ドイツで初めての、言葉の本当の意味での自由な作家、生き方が真に自由である作家であったこと、さらに、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教を、個人として、人間として、まったく対等に、完全に平等に扱っていること(注21)、ドイツのインテリゲンツの歴史のなかでも、ユダヤ人に対して何の偏見も抱かなかった、数少ない人であったこと(注22)、政治的、宗教的専制に反対していること(注23)等々を考え合わせると——近代的自我の覚醒を前提とした、個人の意志、理性、判断力の尊重がさもあたりまえのこととなっている、レッシングの近代人としての、自然な姿勢が読み取れる。背伸びした、無理をした姿勢は少しも感じられない。また、未来を先取りしていく時代の先駆者の、孤立した気負いも感じられない。そこには、諸宗教の併存、共存を認めるという意味の寛容な態度、さらに、宗教間の選択の自由のみならず、宗教と非宗教との選択の自由、無神論の選択の余地をも残した、思想の自由、個人の意志の尊重を人間の生そのものであると考えるレッシングの気高い人柄がにじみ出ている。

それは、ある国家の既存の諸宗教の存在とそれらの権利は認めるが、新規の諸宗教の国家への流入を認めなかったモンテスキュー、君主の宗教と他の諸宗教との同権を認めなかったヴォルテールなどのフランスの啓蒙思想家たちの寛容の思想とも一線を画した、それよりもさらに一步進んだ思想であると言えよう。

次は、ナータンの「その宝石には、秘密の力があまして、この力を堅く信じて指輪をはめておる者は誰でも、神と人間に愛されるということでした。」という箇所と裁判官(ナータン)の「本当の指輪には、愛を受ける奇跡の力、神と人間に愛されるという奇跡の力があるということを確認に私は耳にした。これが判決を下さなければならない！なぜならば、偽の指輪には、その力が絶対になからである。ところで、お前達二人が最も愛しているのは誰だ。言ってごらんさい。告げなさい。お前たちは黙っているのか。」という箇所の愛の問題であるが、「愛を受ける奇跡の力」すなわち「神と人間に愛される」という言葉から判断するならば、レッシングのいう愛とは、信仰を根底に持つ人間の神への愛——「この力を堅く信じて指輪をはめておる者は誰でも」という台詞や「めいめいが自分の指輪こそ間違いなく本物だと信じなさい。」という台詞を参照すればよい——を前提とした、「愛を受ける奇跡の力」、つまり「神に愛される」というような神の愛——これがキリスト教の愛の神学的本質である——にとどまらない。それは、そのような神の愛——もう少し言えば、神の恩寵、神による救い、神による浄福——だけには満足しない。それには、レッシングが「愛を受ける奇跡の力」という言葉に付け加えて「神と人間に愛される」と言っているように、神だけでなく、人間によって愛されること、つまり、人間による人間への愛が不可欠なのである。否、指輪の真贋の判断の決め手が、三人の内、他の二人によって最も愛されているかどうかであるということから判断しても、レッシングの主張したいことは、人間による人間への愛、人間の人間に対する愛こそが人間にとって本質的な重要性を持つということなのである。(注24)つまり、神の人類愛ではなく、人間の人類愛こそが、かけがえのないものであり、それが(人間の)愛の本質であるということなのである。

再度「神と人間に愛される」という問題に立ち帰るが、キリスト教の精神からして、神に愛されるということは、すなわち人間に愛されるということであり、神による愛(神の愛)と人間による愛(人間の愛)とは本来不可分のものであり、そこに何らの溝も、矛盾もないはずである。むしろその二つの愛は同一のことであるはずである。少なくともレッシングはそう考えている。それだから、裁判官(=レッシング)は、「神と人間に愛される」ことが指輪の真贋の判断の決め手であると言いながら、「人間に愛される」ということだけによって——神によって愛される人が、人間によって愛されないはずがないのと同様、人間によって愛されながら、神によって愛されないということは、ありえないことであるから——それを唯一の判断基準にして、指輪の真贋、つまり、真の神はいずれであるか、真の宗教はいずれであるかについて、判決を下そうとしたのである。

これはこれでまた痛烈なキリスト教批判となっている。キリスト教の場合——単にキリスト教にとどまらず、以下の原理は諸々の世界的な一神教に共通であろう——神による愛、恩寵、浄福、救い——この場合でさえ、現世の、地上の救い、幸福、浄福ではなく、来世の、天上の救い、幸福、浄福がキリスト教の目的であるのだが——がキリスト教の根本であること、しかし、その前提として、人間の神への愛、つまり、より厳密に言えば、信仰が必要であること、つまり、神に愛されるには、神を愛すること、神を信ずることがキリスト教には必要不可欠であること、そして信仰とは、一般的な信仰ではなく、父なる神、精霊、イエス・キリストの信仰、つまり三位一体の信仰、特に神=人たる人格神イエス・キリストの信仰であること、さらにキリスト信仰は、恐怖心と憎悪心という意味での、また諸悪の存在の理論的根拠としての、悪魔やサタンや鬼神への信仰と不可分であり、したがって、あらゆる祝福、あらゆる善、まったき愛をキリストへと注ぐことと、あらゆる呪、あらゆる悪、あらゆる憎悪を悪魔へ投げつけることとは、不可分の、同一の行為であること、つまり、キリストへの愛、信仰は、神(キリスト)が絶対的存在者たる唯一神であるが故に、キリストの敵、信仰の敵、無神論者、異教、異端への憎悪、呪、処罰と表裏一体をなしていること、等々が教義の本質的な特徴となっている。否、キリストへの愛が強ければ強いほど、それだけキリストの敵への憎悪が激しくなるという必然的な関係があるのである。キリストへの愛の強さは、キリストの敵への憎しみの強さによって立証されさえもするのである。ここにキリスト教による人類の悲惨な迫害、血の弾圧——実は、『賢者ナータン』では、キリスト教徒によるガトでのユダヤ人虐殺事件で、主人公ナータン自身の妻と7人の息子が焼き殺されたという設定となっている——の理論的根拠があるのである。しかも、キリスト教と異端との間には、なんらの妥協、宥和、共通性もありえない。なぜならば、キリスト教をキリスト教たらしめているのは、まさにキリスト教を異教から区別しているものだからである。それゆえ、非妥協的な戦いがあるのみである。「常日頃は兄弟達(=ユダヤ教、キリスト教、イスラム教)の最も良いところだけを喜んで信ずるにやぶさかではないが、兄弟を詐欺的行為のかどで非難せざるをえないし、必ず裏切者を見つけ出して、是非復讐してやりたい」という台詞とかレッシングの十字軍批判^(註25)は、このことを如実に物語っている。だから、裁判官の発言は、差別され、抑圧される人間への愛、人類愛から出発したにもかかわらず、キリスト教が発展して権力の座につくや、人間による人間への愛、人類愛を忘れてしまったばかりか、人間と人間との戦い、戦争までも行なってきたキリスト教に対する厳しい批判となっているのである。

しかし、批判はその面に限らない。前述したことから明らかなように、キリスト教の愛とは、一言で言えば、キリスト教徒のキリストへの愛であり、キリストのキリスト教徒への愛である。そして、キリスト教の原理から必然的に結果してくるものではないが、キリスト教によって許可されているものとして、キリスト教徒によるキリスト教徒への相互愛、つまり、キリスト教内部での愛である。裁判官の判決の基準においては、このキリスト教内部での愛、一宗教の内部に限定された愛、信仰の愛、宗教の愛も批判の俎上に載せられているのである。キリスト教のイスラム教に対する愛、キリスト教のユダヤ教に対する愛、イスラム教のキリスト教に対する愛、イスラム教のユダヤ教に対する愛、ユダヤ教のキリスト教に対する愛、ユダヤ教のイスラム教に対する愛というような、宗教の枠を越えた愛が問われ、試されているからである。このことは、「(お前達の)指輪は後向きにしか力を出さないのか。外に向かっては力を発揮しないのか。めいめいが、ただ自分自身だけを一番愛しているのか。おお、それでは、お前達は三人とも皆、詐欺にかかった(偽物を掴まれた)詐欺師だ。お前達の指輪は、三つともすべて本物ではない。」という台詞とか、あるいは「一つの」にわざわざ強調点まで打った台詞「一つの指輪の専制に耐えきれなくなった」などという裁判官の言葉にはっきりと見て取ることができる。

レッシングは、「人間に愛される」ということを付け加えることによって、信仰の愛の単なる批判にとどめず、より積極的に自分の見解を展開するのである。キリスト教的愛、イスラム教的愛、ユダヤ教的愛等々の、「的」という限定詞を付けた、限定された宗教愛に対して、制限を課されない、無限定の、普遍的な愛、人類愛を説く。「父親がお前達三人すべてを愛していたこと、しかも、一人をひいきして、他の二人を苦しめたくないが故に、同じように愛していた」とか「父親の清廉な、偏見のない、自由な愛を倣おうとめいめいが熱心に努力するがよい!」とかいう言葉は、そのことを言っているのである。

しかし、レッシングはそこにとどまっていない。神の人間への愛と人間の人間への愛とが不可分であり、同一であるならば、神の人間への愛は、人間の人間への愛によって確認されるということであり、さらに言えば、人間の人間への愛によって確認されなければ、もしくは、人間の人間への愛なくしては、神の人間への愛は存在しないし、無であるということなのである。確認されないものは無であるからである。もしくは、永遠に実現されないもの、力として、現実に現象しないものは無であるからである。否、無であると断定を下すことがレッシングの主眼ではない。そうではなく、確認されえないもの、真理かどうかを認識したり、判断したりすることのできないもの、これが人間の中心的な関心事になるべきではなく、日々確認されうる、目に見える人間愛、人々への善行が大切なのである。しかもこの不断の日常的な愛、善行は、報われるとは限らないのである。むしろ永遠に報われないのである。これは、「お前達めいめいが、指輪の宝石の力を顕現させる競争において、努力するがよい。柔和な心、心から人と仲良くやっていくこと、善行、心底からの神への帰依によって、その力の顕現を促すがよい。そして、それからお前達の(はるか先の)子孫の代になって宝石の力が現れたならば、何万年以上も先のその時に、私はお前達を再びこの裁判官席の前に召喚することにする。」という台詞に明らかである。つまり、奇跡の力の顕現は、「何万年以上も先」の——あくまでも可能性としての——顕現である。だから、人間は、宝石の力の顕現、神の恩寵、神の愛を当てにしたり、報酬や代償を求めたりしてはならないのである。無欲の善行、愛を実行しなければならぬのである。報われるとは限らない、不断の、無限の善行、愛を

である。努力そのものが大切なのである。人間にとって重要なことは、結果よりも過程なのである。過程にこそ進歩があるのだ。進歩の原動力は過程であって、結果ではないのだ。この過程は、人間の完全性をめざして、個の完全性ととどまらず、類の完全性をめざして、無限に続く。そういう過程を経てのみ、類としての人間の無限の発展が可能なのである。(注26)これがレッシングの思想である。

最後に、これまで展開してきたレッシングの思想の特徴を述べるならば、「神と人間に愛されるという奇跡の力」のなかで、神に愛されるということは、いつのまにか、思想の展開のなかで脱落し、「人間に愛される」という箇所には比重が移ったということ、否、専らそれのみによって、彼の思想が展開されていったということは、神の人間への愛ではなく、人間の人間への愛、人類愛が主たるものになり、神の人間への愛は従属的地位に退き、神が主で、人間が従であるキリスト教の場合とは逆に、人間が主になり、神が従になってしまったということである。人間の神に対する愛や神の人間に対する愛ではなく、人間の人間に対する愛こそが根本であり、かつ重要であること、神の力、宗教の力、信仰の力が人間を善にするのではなく、人間の善に向けての、人間の理性の発展に向けての、人間の人格の完成に向けての、無限の努力が人間を善にすること、等々である。一言で言えば、神を客体化し、人間を主体にした、人間主体の思想、人間主義の思想である。この人間主体の思想、人間主義の思想は、他の問題においてもはっきりと現れている。その問題とは、「秘密の力」、「愛を受ける奇跡の力、神と人間に愛されるという奇跡の力」という台詞にあるように、奇跡の力の顕現の問題である。「真の指輪は証明できませんでした」という言葉と「お前達めいめいが、父親の指輪を持っているのであれば、めいめいが自分の指輪こそ間違いなく本物だと信じなさい。・・・父親の清廉な、偏見のない、自由な愛を倣おうとめいめいが熱心に努力するがよい！お前達めいめいが、指輪の宝石の力を顕現させる競争において、努力するがよい。柔軟な心、心から人と仲良くやっていくこと、善行、心底からの神への帰依によって、その力の顕現を促すがよい。」という裁判官の言葉から判断する限り、レッシングの言わんとするところは、対象(指輪=神の真贋)はどうであれ、たとえ偽であっても、父の「清廉な、偏見のない、自由な愛」「柔軟な心」に倣って、それに近づくための無限の努力をすること、換言すれば、心から信じて、誠実に、人間的に実践すること——文字通り「心から人と仲良くやっていくこと、善行、心底からの神への帰依」——が重要であるということである。ということは、神が人間を助け、人間に恩恵を施し、奇跡を行なうのではなく、人間が絶えざる努力によって神の力の顕現を助長し、神をして、神を媒介として、恩恵をほどこさせ、奇跡を起こさせるのである。「力の顕現を促す」のである。神が、神の力が人間を支配し、左右するのではなく、人間が、人間の力が、人間の善行、人間の善に向けての無限の努力が神を左右するのである。だから、レッシングの考えでは、神は主体となっていない。それは客体である。人間が主体なのである。

レッシングは、このことを、キリスト教の外部から、キリスト教とは独立に、キリスト教に對置して、主張しているのではなく、キリスト教と真正面から取り組む中で、キリスト教の内部から、キリスト教の内的矛盾の解決として、キリスト教を拠り所にして、人間主体の思想を導き出しているのである。レッシングがキリスト教のために(注27)、キリスト教の精神を巡って、キリスト教に即して、ゲーツェ牧師と論争した所以である。いわば、神学の立場における神学の否定である。もっとも、導き出されたものとしての、このキリスト教の真

理は、宗教としてのキリスト教とは似て非なるものであり、正統派から見れば、キリスト教からの遊離、背反ではあるが。

このレッシングの人間主体の思想は、キリスト教の思想の核心をすでに転倒させてしまっているが、ただ、神の人間への愛と人間の神への愛との関係、特に、人間の神への愛と人間の人間への愛、人類愛との関係が自覚されていない、もしくは、概念的に解明されていないだけである。つまり、神が、神の本質が何であるかが、レッシングの場合には、徹底的に突き詰められていないのである。もう一步突き進んで、神が人間の類的本質の対象化されたものであることが明らかにされれば、神の人間への愛とは、人間の人間への愛であり、そしてまた、人間の神への愛とは、人間の人間への愛であり、すなわち、人類愛であるという真理が現れるのである。神は消え失せ、真理へと解消されるのである。フォイアーバッハのいう主語と述語の転倒が問題となってくるのである。すなわち、「神は愛である」という命題ではなく、その逆の命題「愛は神である」という命題がキリスト教の真理として現れるのである。それは神のような彼岸の、天上の、空想的な、神秘的な愛ではなく、此岸の、現実的な、生身の愛であり、諸個人がその実現をめざして努力する価値のある愛、手の届くところにある愛である。真の意味の、神の人間化である。(注28)それがキリスト教自身の赤裸々な——超人間的、超自然的、超理性的本質としての神を、人間的、自然的、理性的内在的本質へ還元した——真理なのである。形式上の神の肯定、内容上の神の否定である。

西欧の近世からの思想上の歩みを、まったく大雑把に、キリスト教的世界観との格闘、就中、神の人間化の歴史であると規定することが許されるならば、ボッカチオ——彼がこの歩みの出発点に位置しているとはいえないであろうが——の諸宗教の消極的否定からフォイアーバッハのキリスト教の本質の理論的解明へという思想の流れを意識して考察して明らかになったように、レッシングはその思想の歴史の発展に少なからぬ貢献をしていると言えるであろう。ドイツ古典哲学よりも早い段階で、余儀なくされた、文学という手段を用いて、しかし、実に感動的に。

注

(8) (注7)を参照。

(9) このことは、第一章でも触れた『第二訴答』の中の有名な言葉、「もし神が右手に全真理を持ち、左手には、永遠に誤謬を繰り返すという補足を付けたうえで、真理への止むことなき衝動を隠し持っていて、私に『選べ!』と言われたならば、私は神の左手に謙虚にひざまずき、『父よ、与え給え! 純粋な真理はやはりあなただけのものなのですから!』と言うでしょう」からも分かるであろう。

(10) これこそまさにゲーツェ牧師との神学論争の継続であり、彼に対するレッシングという一人の小さな人間のいきざまの表明である。

(11) (注7)を参照。

(12) このことは、「最後にそれを手に入れた男には三人の息子があって、三人とも皆男ぶりがよくて、勇敢で父親に孝順でありました。それで、父親も三人を同じように愛していました。…父親はどの息子も同じように愛していましたので、…」とか「息子は各々…証拠としてそれぞれ指環を持ち出して見せました。ところが指環(=三つの宗教)はどれも全く同じなので、どれが真物だから全くわかりませんでした。」という台詞を見れば、明らかである。

(13) 林氏も『文芸復興』の中で、ボッカチオの思想の特徴は、宗教的無差別の思想、懐疑的精神、寛容的精神であると指摘している。

- (14) 『デカメロン』の訳者野上素一氏も、「彼は神を畏れないで、勇敢に人間性の探究に邁進したのであった。中世の桎梏から脱却して、近世へ向って躍進したのであった。」(17)と述べている。
- (15) 野上素一氏は、「シエナのチェルトーザにピエトロ・ペトロニーニという僧侶が住んでいて、未来を予知する不思議な能力があるといわれていたが、その予言によると、ボッカチオは神を信ぜず、自由奔放な態度で冒瀆的な作物を発表するので、その命数が旦夕に迫っている。それ故、今にして悔悟しなければ測り知られぬ神罰を受けるであろう。…それをボッカチオはひどく恐れ、今までのすべての著作を焼き捨てて芸術の女神と永遠の決別をしようかと考えたが、決行前に彼の最も信頼するペトルルカに手紙で相談した。ペトルルカは親切な返事を書いて彼を元気づけ、…決心を思いとまらした。(『デカメロン』だけは、しかし、その時作者の手によって焼き捨てられたともいわれる。)」(18)と書いている。
- (16) 前述の野上素一氏も、『デカメロン』の「作者は人生を喜劇の如く見ていた…作者の立場が対象から距離があるとそういう結果を生ずる…見る者の心意は対象から相当な距離があるから、すぐにむきになったり、いきりたったりすることなく、これも人間、これも人生、と、或る程度まで悟りを開いているように、笑って見ていられるのである。」(19)、「諷諭家には人間を反省させて弱点を矯正しようとする強い正義観念が働いていなければならぬ。ボッカチオの場合は、人間を反省させようとする前に、まず自分で哄笑してしまうくせがあるので、矯正の志向よりは諧謔の衝動が打ち勝っていると見なければならぬ。之は主として作者の対象から離れている距離の大小の差に因るもので、その距離が大きければ大きいほど諷諭よりは諧謔に適合するわけであり、その哄笑は一層朗らかに高く鳴り響く。」(20)と評している。
- (17) 野上素一氏も、『デカメロン』全体の評価としてではあるが、私とほぼ同様な見解を抱いている。「…『デカメロン』の主調となっているものは飽くまでも現実的な、批判的な、諷諭的な、また喜劇的な散文精神であった…」(21)と。
- (18) ここでも、野上素一氏の見解を紹介しておく。「…読者は、特に当時の読者は、これを読んで決してどこも知れない異邦の事と思う気づかいもなく、もちろん、地獄とか天国とかの事ではなく、この地上の、しかも身近に横たわる一地域で、誰でも知っている、もしくは誰でも感じ得る人たちの噂が取り上げられてあるのだから、まず以って親しみ易さが感じられたことであろうし、且つそれぞれの説話のなかで語られる事柄も、上品なこと、下品なこと、尊敬すべきこと、笑うべきこと、いずれも『人間性』の強く現れたことのみであるから、…ダンテの『神曲』などとは反対に、人間を天上へ引き上げようとする代わりに、地上にどっしりと尻を据えて、この世の生活から殆んど一歩も外へ出まいとする。」(22)
- (19) ここでは、ルターとレッシングの歴史的役割の形式面の類似性だけを問題にしている。両者の思想内容がまったく異なること、否、対立物をなしていることは、言うまでもない。レッシングがキリスト教と争う場合、彼はほとんど常にローマ・カトリックよりも、むしろルター派に批判の矛先を向けているくらいである。
- (20) 言論の自由について言えば、第一章を見てもらえば分かるように、レッシングはそのために生涯闘争したようなものである。念のため、彼が言論の自由についてははっきりと声明した箇所を一つだけ引用することにしよう。「どんな人も自分に真理だと思えることを言えばよいのです！真理そのものは、神にお任せしておけばよいのですから！」(23) 出版の自由については、『ハンプルク演劇論』の次の箇所を挙げておくのが最も適切であろう。「しかし彼らは同時に自費出版をも妨げようという腹なのだ。それを妨げようとするものは誰なのか。…かつて自費出版が禁止されたことがどこかにあったであろうか。自費出版を禁止するということがどうゆう訳でできるのでしょうか。どんな法律であれ、学者が自分自身の業績をできるかぎり役立てようとする彼の権利を、侵害することができるであろうか。…そして出版業に関わってはならない者が誰かいるのでしょうか。いつから出版業がギルドになったのか。出版業の独占の特権とは

どんなことなのか。誰がそれに独占的特権を与えたのか。」⁽²⁴⁾

- (21) このようなレッシングの諸宗教に対する平等の精神は、「確かなことは、父親がお前達三人すべてを愛していたこと、しかも、一人をひいきして、他の二人を苦しめたくないがゆえに、同じように愛していたことである。さあ！父親の清廉な、偏見のない、自由な愛を倣おうとめいめいが熱心に努力するがよい！」という台詞やユダヤ人ナータンの形象そのものに、いかになく発揮されている。

さらに、第4幕第7場の次の対話にもはっきりと表れている。「修道士：ナータン！ナータン！あなたはキリスト教徒です！神にかけて、あなたはキリスト教徒です！あなた以上に立派なキリスト教徒は決していなかった！」「ナータン：(そう言っただけならば、私だけでなく、)わたしたち(双方)にとって嬉しいことです。と申しますのも、私がキリスト教徒だとあなたに思わせている、まさにそのことが私に、あなたがユダヤ教徒であると思わせているからです。」⁽²⁵⁾

当然のことながら、ナータンはユダヤ教徒であり、本来ならば、「あなたはキリスト教徒です！神にかけて、あなたはキリスト教徒です！あなた以上に立派なキリスト教徒は決していなかった！」という、キリスト教の修道士の言葉は、ナータンにとっては侮辱でしかなく、決して誉め言葉にはならないはずである。逆に、ナータンの言葉は、キリスト教の修道士にとっては、不愉快極まる言葉のはずである。このような対話が自然となされるのは、レッシングがキリスト教とユダヤ教の根本は同じであると考えているからであり、両者をまったく対等に扱っているからである。

そればかりか、レッシングは、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の歴史を熟知したうえで、その三者を平等に扱っているのである。否、彼をユダヤ教やイスラム教に対する偏見や恣意的な好みと選択へと至らないように保証しているのは、諸宗教に対する彼の豊かな知識であるとさえ言える。例えば、レッシングは、キリスト教の修道士に「…キリスト教全体は、やはりユダヤ教の上に建てられたのではないのでしょうか。われわれの主自身からしてユダヤ人であられたということを、キリスト教徒たちが非常によく頭から忘れてしまうのを見ると、私はしばしば腹がたつし、涙が出てとまらないことがありました。」(第4幕第7場)⁽²⁶⁾と言わせている。

- (22) レッシングは、文学において、ユダヤ人ナータンの中に啓蒙主義の普遍の人間像を形象化しただけでなく、実生活においても、ユダヤ人アレクサンダー・ダーフェゾンが不当に拘禁されると、友人のメンデルスゾーンに書簡を送り、彼を支援してほしいと依頼して、救援活動を行った。そしてレッシングがこの世を去る前年の1780年、そのアレクサンダー・ダーフェゾンが解放されると、彼を自分のところに引き取って世話をしたりもした。

- (23) このことは、「家の中の一つの指輪の専制に耐えきれなくなった」という台詞を見れば、明らかであるが、何はさておき、悲劇『エミーリア・ガロッティ』こそはその鮮やかな形象化である。

- (24) 第1幕第1場に「そうすれば(神殿騎士を実際に連れてくるならば)、この甘い妄想(この妄想は、自分を救ってくれたのはこの世の人の子でない天使だ、と思っているレービャの妄想のことであるが、ついでながら、その妄想では、ユダヤ教徒とキリスト教徒とイスラム教徒が仲良く交わる)は、甘い真理に席を譲るよ。というのはだね、ダーヤ、人間にとっては、天使よりもやはり人間の方が好ましいのだよ。そう思わないかね。…」⁽²⁷⁾というナータンの台詞がある。また、第1幕第2場にもナータンの次のような台詞が出てくる。「…お前を救ってくれた方に——その方が天使であろうと人間であろうと——お前たち、特にお前は心から多くの大いなる恩返しをしたいと思っているのだろう。違うかね。ところで、お前たちは(その方が天使だとしたら)その天使にどのような恩返しを、どのような大いなる恩返しをすることができるのかね。…」⁽²⁸⁾

これらは、「…人間というよりもむしろ天使によって救われたと考えて、どこが悪いのでし

ようか。…」(29)と云って、人間よりも神を、奇跡を重視するダーヤ(キリスト教徒)と、現実と人間を、人間と人間との関係を、人間の愛を重視するナータン(=レッシング)との鮮やかな対照である。

(25) 『ハンプルク演劇論』の第7号に鋭い十字軍批判が出てくる。「…法王たちの政治的術策がもって起こった十字軍自体が、かつてキリスト教の迷信が犯した迫害のなかで、その行為において、最も非人間的な迫害となったからである。…モスク(回教寺院)から盗みをした若干の人々を罰するために、彼らを引きつれて来ることが、(キリスト教の)信仰のないアジアを廃墟にするために、正しい信仰を持つヨーロッパの人口を減らした、われわれの狂暴な行いに、比較できるというのであろうか。」(30)

(26) レッシングの人類の発展についての思想は、『人類の教育』に詳しい。レッシングによると、人類は、幼年期としてのユダヤ教(=旧約聖書)の時代、青年期としてのキリスト教(=新約聖書)の時代、壮年期としての理性の王国の時代、つまり、人間が各人の理性に基づいて考え、行為することができるようになり、聖書も宗教も不要になった、人類の教育の最高段階の時代、レッシング自身の言葉を借りて言えば、「善が善なる故に善を行う完成された時代」(31)、「理性に基づく真理」(32)の支配する「新しい永遠の福音の時代」(33)という三つの段階を経て、逐次発展していくとされる。宗教は人類に対する啓示であると考えられているのである。さらに、レッシングの解釈では、啓示は人類の教育であり、ユダヤ教もキリスト教も人類を教育するための啓示なのである。そういう意味で、人類はユダヤ教やキリスト教を必要としたのである。

このようなレッシングの思想は、単なる宗教の不要論でもなければ、宗教の廃止論でもなく、アナーキーな宗教否定論でもない。人類が発展した未来に、宗教を必要としない理性の王国が到来する——もっとも、レッシングは、啓蒙思想家にふさわしく、宗教の問題を、単に理性のみの問題として、極めて一面的な観点からしか捉えていないために、人間の理性が発展すれば、宗教が無くなるかのように単純に考えてはいるが——ということは、裏返して言えば、人間の理性が十分に発達しないうちは、人類は宗教を必要とするということであり、宗教の大切な意義——人類の教育としての意義——があるということである。人類がこのような漸次的に、類として無限に発展していくと考えられており、諸宗教が、このような人類全体の発展の中に位置付けられているのであるから、その発展の一里塚にしか過ぎない有限な諸宗教が——自らの限定された、絶対的でない、歴史における役割、意義を自覚して——寛容でなければならないのは、レッシングにとっては、いわば当然のことなのである。これは、現存の、あるいは、既存の宗教間の、また異端や無神論者への単なる寛容の思想にとどまらない。もっとポジティブな思想の展開である。人類がもっともっと発展し、進歩した未来の理想から反省されたものとしての、歴史的に有限な諸宗教という考えだからであり、そこにおける相互の友愛であるからである。したがって、諸宗教が自らを唯一絶対、永遠のものとして、あるいは、聖職者たちが、自分たちの解釈する教義が絶対的に正しいとして、専制的に振舞い、支配することに、レッシングが強く反対し、相互批判と批判精神の重要性を訴えたのもまた当然といえる。

(27) 第一章でも紹介したレッシングの言葉「私は、あなたがあなたのすべての説教壇や新聞を用いて行っているよりも実際多くの貢献を、キリスト教に対してしたと信じている。」(34)がこのことを如実に物語っている。

(28) 神の人間化の思想にも様々な段階がある。レッシングもナータンを通じて、天使とその奇跡について、注目すべき発言をしている。

キリスト教の教義の根本の一つである奇跡——ここでは天使の奇跡——について、ナータンは次のように述べる。(天使の)「白い翼だと！そうか。(頭に被って)前に大きく広げた、神殿騎士の白いマントのことだな。」(第1幕第2場)(35)「ただの人間、つまり、自然が日々生み出しているような人間が、お前にこのような献身的行為を実地に示されたとしても、その人は、

お前にとっては、天使に違いないであろう。」(第1幕第2場)⁽³⁶⁾「奇跡の最高のものは、真の、本当の奇跡が非常に日常的にわれわれの身の回りに起こりうるし、起こるように(神の)意志が働いていることなのだ。…」(第1幕第2場)⁽³⁷⁾

ナータン(=レッシング)は、幻想、夢想に、冷たいが、厳しい、紛れのない現実、真理を常に対置する。というよりも、すでに引用したナータンの台詞「そうすれば(神殿騎士を実際に連れてくるならば)、この甘い妄想は、甘い真理に席を譲るよ。」でも明らかのように、神的、超自然的、超人間的諸現象を、自然的な、人間的な諸現象として、理性の枠内で捉え、解釈しようとするのである。つまり、幻想の真理を現実の中に、天上的なものの真理を地上的なものの中に、彼岸的なものの真理を此岸的なものの中に、超自然的なものの真理を自然的なものの中に、超理性的なものの真理を理性的なものの中に、神的なもの、真理を人間的なものの中に求めるのである。換言すれば、超自然的奇跡を自然的奇跡へと、幻想を現実へと、天上的なものを地上的なものへと、彼岸的なものを此岸的なものへと、超自然的なものを自然的なものへと、超理性的なものを理性的なものへと、神的なものを人間的なものへと解消しているのである。

引用文献

- (17) 『デカメロン』(一) 39ページ
- (18) 『デカメロン』(一) 24～25ページ
- (19) 『デカメロン』(一) 34～35ページ
- (20) 『デカメロン』(一) 36ページ
- (21) 『デカメロン』(一) 29ページ
- (22) 『デカメロン』(一) 30ページ
- (23) Der Brief von Lessing an Johann Albert Heinrich Reimarus Wolfenb., den 6. April 1778
- (24) G.E.Lessing: Hamburgische Dramaturgie, Lessings Werke Herausgegeben von Kurt Wölfel Insel Verlag 1967, Zweiter Band S. 532～533
- (25) G.E.Lessing: Nathan der Weise, Lessings Werke Herausgegeben von Kurt Wölfel Insel Verlag 1967, Erster Band S. 567
- (26) Dito S. 565～566
- (27) Dito S. 474
- (28) Dito S. 478
- (29) Dito S. 477
- (30) G.E.Lessing: Hamburgische Dramaturgie, Lessings Werke Herausgegeben von Kurt Wölfel Insel Verlag 1967, Zweiter Band S. 150
- (31) G.E.Lessing: Die Erziehung des Menschengeschlechts, Lessing Gesammelte Werke in zehn Bänden Aufbau-Verlag Berlin und Weimar 1968, Achter Band S. 612
- (32) Dito S. 610
- (33) Dito S. 612
- (34) G.E.Lessing: Anti-Goeze, Lessings Werke Herausgegeben von Kurt Wölfel Insel Verlag 1967, Dritter Band S. 447
- (35) Cf.(25) S. 475
- (36) Dito S. 475
- (37) Dito S. 475

参考文献

- (1) Renate Klar und Kurt Wölfel : Lessings Leben und Werk in Daten und Bildern Insel Verlag 1967
- (2) Karl S. Guthke und Heinrich Schneider : Gotthold Ephraim Lessing J.B.Metzlersche Verlagsbuchhandlung und Carl Ernst Poeschel Verlag GmbH in Stuttgart 1967.
- (3) Gotthold Ephraim Lessing in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten Dargestellt von Wolfgang Drews Veröffentlicht im Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, Reinbek bei Hamburg, August 1962
- (4) Heinrich Schneider : Lessing Zwölf biographische Studien mit 4 Tafeln Verlag „Das Bergland-Buch“ Salzburg 1950
- (5) Erich Schmidt : Lessing. Geschichte seines Lebens und seiner Schriften. 2 Bde. Berlin 1884-1892
- (6) Franz Mehring : Die Lessing-Legende Ullstein Buch
- (7) Paul Rilla : Lessing und sein Zeitalter Aufbau-Verlag Berlin und Weimar 1968
- (8) Lessings Werke Herausgegeben von Kurt Wölfel Insel Verlag 1967
- (9) Gotthold Ephraim Lessing Gesammelte Werke Aufbau-Verlag Berlin und Weimar 1968
- (10) 林達夫著『文芸復興』, 飛鳥新書, 1947年
- (11) Ludwig Feuerbach : Das Wesen des Christentums, Sämtliche Werke Neu Herausgegeben von Wilhelm Bolin und Friedrich Jodl Frommann Verlag Günther Holzboog Stuttgart-Bad Cannstatt 1960 Sechster Band Zweite, unveränderte Auflage
- (12) Ludwig Feuerbach : Vorläufige Thesen zur Reform der Philosophie dito Zweiter Band Zweite, unveränderte Auflage
- (13) Ludwig Feuerbach : Grundsätze der Philosophie der Zukunft dito Zweiter Band Zweite, unveränderte Auflage
- (14) グラント著, 茂泉昭男・倉松功訳『聖書解釈の歴史』 新教出版社 1966年
- (15) H. カメン著, 成瀬治訳『寛容思想の系譜』 平凡社 1970年
- (16) アルベール・バイエ著, 二宮敬・二宮フサ訳『自由思想の歴史』 白水社 1969年
- (17) 堀米庸三著『正統と異端』 中公新書 1971年
- (18) マックス・フォン・ベーン著, 飯塚信雄訳『ドイツ18世紀の文化と社会』 三修社 1984年
- (19) W. H. ブリュフォード, 上西川原章訳『18世紀のドイツ ゲーテ時代の社会的背景』 三修社 1980年
- (20) Alexander Altmann : Lessing und Jacobi Das Gespräch über den Spinozismus, Lessing Yearbook 3 American Lessing Society
- (21) Peter Heller : Paduan Coins Concerning Lessings Parable of the Three Rings, 1972 Lessing Yearbook 5
- (22) Otto Mann : Lessing Sein und Leistung Mclmxi Marion von Schröder Verlag Hamburg 1961
- (23) Gotthold Ephraim Lessing Herausgegeben von Gerhard und Sibylle Bauer Wissenschaftliche Buchgesellschaft Darmstadt 1968
- (24) ヴォルテール著, 中川信訳『寛容論』 現代思潮社 1970年